

*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



この子らのために

昨年8月、政府が実施した「脱原発に関する討論型世論調査」では、「原発ゼロ」が47%を占め、他の世論調査でも、福島の人々はもちろんのこと、全国平均で8割を超える人々が、「原発はもう要らない」という意思表示をしていました。しかし、年末に行われた衆院選では、原発に反対するほとんどの議員が、市民から見捨てられて落選をしてしまいました。



＜南相馬市の幼稚園にて＞

日本のみならず世界中の人々が、自分達の目と耳を疑い、「日本人はどうなっているのか」と驚きを隠そうとしません。この結果をもたらした背景には、あの「原発は安全」を繰り返しながら、完全防護服姿で現地入りした枝野幹事長（当時）のいでたちが、奇しくも証明しています。

「将来健康を害するから危険」を「直ちに健康を害さないから安全」と言い換え、「冷温停止」を「冷温停止状態」、「脱原発」を「脱原発依存」、「想定放棄」を「想定外」、「2030年までに停止」を「2030年代までに停止」、「5mSv/年は放射線管理区域」を「20mSv/年まで安全」と言い換えるなど、ウソにウソを重ねた、「政府・電力会社・御用学者・マスコミ」など、いわゆる「原子カムラ」の情報操作がありました。

世界的な視点から言えば、IAEA（国際原子力機関；南相馬市に常駐しようとしています）とWHO（世界保健機関）は、1959年に「相手の合意がなければ、かってに情報や見解を公表できない」という密約を結んでおり、ウクライナやベラルーシの医師たちが警告している、内部被曝などの危険性についても、WHOはIAEAに対して口出しをする事ができないのです。幸いにして、あの「911」や「311」を教訓として、政府やメディアのウソに気づき、それを許さないという人々が増えています。

「風評被害」で、「生産者」と「消費者」が対立し、「がれきの受入」で、「汚染地」と「汚染拡散地」が対立するのはもうやめましょう。同じ仲間（被害者）じゃありませんか。

ウソに目を見開き、ウソに耳を研ぎ澄ませ、ウソに口を開いて「NO!」といしましょう。

この子ども達を守るためには、私達大人が目覚めなければならないのです。

（神野 英樹）

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部（店番号 150）

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 神谷 俊尚

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172（月・水・金 10:00～17:00）

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

クリスマスカード ～フクシマへ～

(とどけ鳥のブログから <http://todokedori.blogspot.jp/>)

波乱万丈！ 測定センターの師走編

測定センターには8人のボランティアがいます。毎日全員が来ているわけではありません。火曜日から金曜日まで人数的にバランスよく、測定業務が円滑に進むようシフトを組んでいます。

今年の最終週は、通常の測定業務に加え、クリスマスカード配布、最終日の鍋パーティー。

測定ボランティアさんにはできる範囲での出席をお願いし、ボランティアや測定センターのサポートメンバー全員の協力で、何とか乗り越えることができました。

いよいよクリスマスカードを幼稚園に！

幼稚園の正門をくぐると…「サンタだ！」「サンタさん！」「サンタさんだ！」と建物の中から子どもたちの声が。（南相馬市内幼稚園）



＜南相馬市 聖愛保育園の子ども達＞

クリスマスカード配布最後の12月25日

病院にも配布に行きました。クリスマスカード初めてのところです。

入院されている方、外来の方にお渡しさせていただきました。喜んでいただきました。

1人のスタッフの方の声で実現できたことです。スタッフの方にもメッセージカードをお渡しさせていただきました。看護師も先生も、栄養士も不足している南相馬の病院。厳しい状況の中、患者さんのために南相馬に残り、がんばっているスタッフです。全員には行きあたりませんでした。1通のメッセージカードをスタッフのみんなが見られるように病院に飾ってくれているそうです。段取りしていただいたスタッフの方に感謝です。

全国からの福島子ども達を思って書いてくれたメッセージカード。今年で2年目です。

全国から届けられた約 1,000 通のメッセージカードと、愛知県のお母さんが編んでくれた約 50 の手編みのマフラーは、南相馬の一人一人のもとに届きました。お渡しする時も、時間の許す限り受け取った方とメッセージカードを開いて一緒に見るようにしました。福島から遠くにいてできること、近くにいてできること、それがひとつの線につながりました。

お礼の声をいただいています。

*「貴団体の取り組みに感謝しております。園長もぜひ今後とも協力し合っていきたいと申しました。ぜひ活動の資金としてお役立てください。」

*「利用者さんたちはとても喜んでいました。メッセージを書いてくれた子ども達一人一人に本来ならお礼を言わなければなりません…」

*「こうした継続した支援は本当にありがたいです。」
「また来年も…」というお言葉を何か所かのスタッフや施設長さんからいただきました。（つづく）



「南相馬便り」 (神谷 俊尚)

クリスマスカードキャンペーンが、今年度も実施されました。福島へは、前年度は「年賀状」でしたが、贈る日時から今回は「クリスマスカード」となりました。

12/18~21、南相馬市内の私立幼稚園4園、私立保育園4園、老健・特養・グループホーム7施設、病院1施設、小学校1学年に、サンタ衣装の「とどけ鳥」メンバーが訪問し、一人ひとりに手渡しさせていただきました(1,059通)。多くの施設・園から、御礼状もいただきました。キャンペーンにご協力いただいた皆様方に、各園・各施設に代わりましてお礼申し上げます。

「放射能測定センター・南相馬」(愛称:とどけ鳥)は、11月後半から季節的要因もあり、持込検体数は減少しています。1/21現在で、延べ2,400検体です。最近は、野菜や水よりも土壌が多く持込まれています。「3月中旬迄はこのような傾向が続くのではないかと、感じています。

12/20、**双葉町議会で井戸川町長の不信任案が可決**されました。県内の多くの自治体が、政府・県の帰還政策に追従する中、町民の安全を訴え続け「チェルノブイリ事故以降の基準から見ても、双葉町内は、今なお人が住めない汚染状況にある」と言い続けている。11/28の中間貯蔵施設の現地調査に関する会議に欠席をした…。これらを理由に不信任を受けたのです。不思議なのは、昨秋以降、次期総選挙で自民党優勢の声が聞こえ始めた頃から、町議員の町長批判の声が急速に強まり、不信任案可決となったこと。12/28に町長が議会解散を宣言し、町議会選の実施となりましたが、立候補したのは前議員8名と元議員1名のみ、これを受けて、1/23町長は辞職を決意し辞職届を提出、見えない圧力と町民との気持ちの乖離に、残念な結果となってしまいました。

相双地区(8町村)と飯舘村の避難地域9町村の、25年度小学校(各自治体設置のサテライト校)への入学予定児童数が明らかになった(1/14朝日新聞)。**新入学予定児童 655名 入学予定児童 105名 16%**ほとんどの子どもさんを抱える家庭は、避難先で入学を迎える決断をされたことを示しています。(南相馬市は未発表ですが、予定児童の20%以下では…とされています。)

遅々として進まぬ住宅除染 除染地域に指定された福島県内40市町村(国直轄の相双地区6町村と飯舘村、小高区は含まず)で、今年度中の除染計画戸数(発注戸数)は62,776戸(内南相馬市369戸) 12月末現在作業終了は11,584戸(内南相馬198戸) 実施進捗率18.5%(南相馬53.7%)と、県が発表しました。仮置場の確保が出来ていないことを最大の理由にあげています。この発表で明白なことは、南相馬市の遅れです。南相馬市(小高区除く)では、約18,000戸の除染計画がありますが、H24年度終盤になっても「発注369戸 実施済198戸」という現状です。残念ながら、市民の意識から「除染」という言葉が遠ざかりつつあることが、日常的に感じられます。また南相馬市は、H25年度も米の作付けが中止となりました。3年連続の中止で、ますます農業への意欲が失われ、農業再生の希望が遠ざかります。この状況の中で、昨秋来「菜の花」栽培による農業再生と再生エネルギー生産に向けた動きが始まりました。

「未来&再生エネルギー研究会南相馬」(通称:えこえね)のソーラーシェアリング実施への取組み・なたね播種約5ha、自主的に集まった若者が、農家から土地を借りて「花PJ」に取組み、菜の花も植えて「えこえね」との連携も模索中。また鹿島区内では、独自に農家集団で大規模に菜の花栽培を検討中。これらが近い将来結集して、南相馬が「再生自然エネルギーの大集積基地」になる様に働きかける必要があります。



く在りし日の高橋亨平氏：原町中央産婦人科医院(中日新聞より) >

1/22、震災以降、医療を続けながら南相馬除染研究所、「えこえね」南相馬を立上げ代表を務め、先頭に立ち南相馬の再起に走り続けられた、原町中央産婦人科医院長の高橋亨平さんが、がん闘病の末逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

第5期の「南相馬市放射線量率マップ」作製の測定作業を、4月に行います。第10次4/12(金)~15(月)、第11次4/19(金)~22(月)です。(詳しくは同封の案内をご覧ください。) 皆様方の参加を、お願いいたします。

————— 政治の現実には悲観せず勇気をもって生きよう —————

「福島原発事故で日本は変わるかもしれない」と、国民は期待した。しかし、衆議院選挙の結果は、再び原発推進の旧体制に戻ったかに見える。国民は福島原発事故に何を学んだのかが問われている。今問われているのは、新たな社会の扉を開く価値観の転換である。

原発の理不尽

原発は、開発当初から理不尽に満ちた技術だった。「原発の立地は人口密集地を避けなければならない」という、国の「立地審査指針」に、それは端的に書かれている。大事故を前提に被害を最小限にするため、原発は過疎地に作られた。しかし、立地市町村の住民一人ひとりにとって、事故で受ける被害の大きさ・重さは、こうした確率論とは無縁である。福島で人々はまさにこうした現実を強制されたのだ。また、過疎地の経済的困難につけ込み、「交付金」という麻薬で人々の理性も奪った。ひとたび原発が出来れば、金の魔力で2基、3基と増殖する。その裏には、大事故による被曝のリスクが隠されていたが、原子力村の専門家たちによって「安全神話」が布教され、人々の思考回路を断ち切った。福島原発事故で、こうした事実が改めて浮き彫りになったのである。理不尽は事故だけではない。事故がなくてもいずれやってくる、廃炉に伴う膨大な放射性廃棄物の処分に伴う被曝労働やコスト負担は、原発の電気とは無縁の将来世代が長きに渡って引き受けることになる。その期間は10万年である。科学の装いをしながら、原発はまさに「神話」の産物であった。それを可能にしたのは、「核を自由に操れる」という近代技術の傲慢である。近代の技術社会で、思想家や哲学者が委縮してしまったのも大きな原因である。10年前にチェルノブイリ救援・中部が招待し、日本各地で講演を行ったベラルーシの女性作家、スベトラナ・アレクシェーヴィチは、名古屋での講演で「チェルノブイリ原発事故の真の原因は、これまでの経済中心主義や便利第一主義という価値観である。今この価値観を変えなければ、第二のチェルノブイリは再び起こるだろう」と予言に満ちた発言をしていた。それが「フクシマ」だった。

価値観の転換こそが未来を作る

福島原発の放射能は、福島にとどまらず首都圏を含む広範囲の大地を汚染した。国の食品基準（100 ベクレル/Kg）によって、汚染食品は国中に拡散している。もはや福島以前には戻れないのが現実である。その中でどう生き抜くのが問われている。日々食べる野菜やコメを何処で誰が生産しているのか、電気は何処で作られているのか、福島原発事故以前の多くの国民は気にも留めていなかった。経済さえ順調に回っていれば未来の幸せも保障される、と考えていた。だが、それは幻想だった。原発事故により一瞬にして水の泡と消えた。衆議院選挙の結果は、またもや国民が過去の成長神話を求めているかのような錯覚をもたらしている。しかし、それはもはや通用しない時代に日本は突入した。高齢化に伴う人口減少や農業の衰退、未来世代が背負う現代のつけ、など、この国の未来はすでに明らかである。政治がどのようにあがこうと社会の未来は変えられない。福島原発事故は、そうした我々の未来を一步早く見せつけたに過ぎないのである。

新たな社会像の創出を

ソ連が崩壊して社会主義の幻想は失われた。しかし、資本主義もまたその限界を露呈している。果てしない国際競争は、人々から仕事を奪い、貧富の格差を拡大している。かつて日本の経済成長を支えた技術は、すでに世界に拡散し、国内産業の地盤低下が続いている。こうした果てしない競争社会を我々はこれからも求めるのか、が問われているのである。新たな価値観とは何か。競争から共生へ、One for all, all for one（一人は皆のために、皆は一人のために）、これはフランス革命の標語であった。時代は変わっても普遍的価値は変わらない。（河田）

スベトラーナ・アレクシェーヴィチ

「チェルノブイリから福島へ」

(2012年3月24日 日本ペンクラブ女性作家委員会シンポジウム「女性と原発」によせて

—抜粋—)

世界中の多くの人たちと同じく、私の一日もまずパソコンのスイッチを入れることから始まります。日本はどうなっているだろうと思いつつながら。

新しいコミュニケーション手段のおかげで、私たちは日本で起きている惨事をリアルタイムで目撃することになりました。原子力からの恐怖によって、世界の人々は互いを身近に感じるようになってきました。政治の世界で使われてきた「敵・味方」「遠くのことか・近くのことか」などという分け方は、意味をなさなくなっています。誰もが、チェルノブイリ事故から4日目には放射能雲がもうアフリカや中国の空に漂ってきたことを思い出しました。ヨーロッパ各国では、家庭用の線量計や放射能の体内拡散を防ぐヨード剤がどんどん売れていきました。誰もがテレビに釘付けで、ニュース番組は戦争中の戦況報告のようでした。

これは日本だけの悲劇なのか、それとも人類全体の悲劇なのか？

これだけの惨事が起きても、文明の力を信ずる気持ちは揺るがないのか？

わたしたちの価値観はどうなのか？

原子力による最初の教訓はチェルノブイリ事故でした。聖書にも、チェルノブイリについての警告が記されていました。

しかし、チェルノブイリ事故は「全体主義」のせいとされ、ソ連の原子炉に欠陥があり、技術的に遅れ、資材などをしかるべく使わないう横流しする性癖のせいだと言われました。こうして原子力の神話は傷つかずに残ってしまったのです。ショックはたちまち消えてしまいました。放射能でたちどころに死ぬわけではないし、5年後に癌になっても何の関係

もないことになってしまいました。「チェルノブイリ事故のあと150万の人が命を落とした」という独自の調査結果を、ロシアの環境研究者たちが出しているのに、それについては黙殺されています。

そして今、再び原子力について教訓を得る時がやってきました。今では「フクシマ」という名は「チェルノブイリ」と同じく世界中に知られています。「広島」「長崎」と並んで世界中に知れわたりました。原子力は軍事用も平和利用も同じことです。世界第3位の経済力を持つ国が、平和利用の原子力を前になすすべを知らない。

荒れ狂った自然力で、数時間、いや数秒のうちに、いくつもの村や町が津波でさらわれてしまいました。進歩という名のあとに残ったのは進歩の残骸ばかり。進歩という蜃気楼の墓場です。原子炉の安全装置は最高レベルと言われていたのに、大地震が起こったら、取るに足りない子ども服のように役に立ちませんでした。

つまり、社会体制が異なっても事故は起きるといえることです。共産主義か資本主義かではないのです。問題は、人間と人間が手にしている技術との関係にあるのです。逆説的かもしれませんが、技術のレベルが高いほどそれに関わる事故はすさまじいものとなります。

私は北海道の海岸にある泊原子力発電所を訪れたことがあります。誰もが私にチェルノブイリのことを尋ね、同情を示してくれましたが、ほほえみながら「自分たちのところではそんなことは起きる心配はない」と口をそろえて言いました。

日本でも、フランスでもそういう言葉を聞きましたし、アメリカでもスイスでも同じような言葉を耳にしました。ソ連の原子力開発の父アレクサンドロフ氏は「ソ連の原子力発電所はサモワール(ロシア式卓上湯沸かし器)



と同じくらい安全で、クレムリンのそばの赤の広場にだって建設できる」と書いています。

チェルノブイリに初めて入ったときのことを思い出します。空では数十機のヘリコプターがうなりをあげ、地上では装甲車や戦車まで動いていて、自動小銃を抱えた兵士達が乗っていました。誰を撃とうというのでしょうか？ 物理学を標的にするとでも言うのでしょうか？ 事故が起きた原子炉のまわりに入りする学者たちは、長いこと普通の背広姿で、防護マスクさえつけていませんでした。事故当初チェルノブイリに行った人々は、まだチェルノブイリにふさわしいレベルでものを考えることができていませんでした。人々は戦争の時のように振る舞っていたのです。

私が見ている目の前で、チェルノブイリ以前の人々が、事故後の「チェルノブイリ人」に変貌していきました。敵はこれまでとは種類の違う新しい敵です。死もこれまで知らなかった容貌を見せるようになりました。すべてが今までどおりのように見え、色も形も匂いも今までどおりなのに、そのすべてが死をもたらしうるという状態。汚染された土地は何キロメートルにもわたって、放射能を帯びた層が削り取られ、コンクリートの容器に納められました。土を地中深くに埋め、住宅や自動車も埋められました。道路や薪は洗浄されました。

事故対策本部の朝の定例会で「この作業には 10 人必要」「こちらには 20 人要る」と言われると、自発的に作業を引き受ける人たちがいて、そういう人たちは、今はもう亡くなってしまったか身体が不自由になっています。そして今、またそういう人たちが日本にいることを、私たちはテレビで見えています。何百人も。この人たちは、わが家を、世界を救う英雄です。それでも、原子力が一番安くつくのだと言える人がいるのでしょうか？

今、世界には 440 の原子力発電所が稼働しています。世界のほぼ 30 カ国で。世界の終わりがくるには十分な数でしょう。そのうちの 20%は地震地帯にあります。ベラルーシは、

チェルノブイリ事故でもっとも被害が大きかったというのに、100 年前大地震があったところに原子力発電所の建設を始めようとしています。100 年前の爪痕は、今も何十メートルもの溝となって残っているのに。発電所を建設するのはロシアです。契約を締結するとき、プーチン首相は「我々の原発は日本の原発より信頼性が高い」と言明しました。

ロシアはオイルダラーの恩恵に浴し、世界の海洋にいくつもの小型のチェルノブイリ型船上発電所を浮かべる計画を立てています。インドネシアやベトナムに売却するために作られるものです。

日本で大惨事が起きたちょうどその日、アメリカの市場で重要な出来事だったのは、iPad の新しいバージョンが発売され、アップル・ファンが文字通り狂喜していたということです。今日人々がハイテクに期待しているのは、便利さと快適さだけです。

チェルノブイリ事故の放射能で死にゆく人たち、あるいは日本の今回の惨事で奇跡的に助かった人や遺族に、訊いてみるといいでしょう。その人たちの消費願望はどういうものか、進歩とは何か。新しい携帯電話や自動車と命のどちらを選ぶかと。

広島、長崎の後、チェルノブイリ事故の後、人間の文明はそれまでとは別の発展の道、「非核」の道を選択すべきだったのではないのでしょうか？

原子力時代から抜け出さなければなりません。私がチェルノブイリで目にしたような姿に世界がなってしまわないために、別の道を模索すべきです。

テレビをつけると日本からの報道です。フクシマではまた新たな問題が起きていると言います。

私は過去について書いていたはずなのに、未来のことだったのです。

スベトラーナさんの著書の翻訳者 三浦みどりさんが、2012 年 12 月 13 日にご逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。

ウクライナを訪問します（2月5日～14日）

昨年は、長年暮らしている 200 戸余りの地域で、防災など全般を統括する役職が回ってきて、家を空けることができませんでした。そんなこともあり、救援・中部の活動にほとんど参加できなかったのですが、役も終わってのんびりしていたところ、1月の運営委員会でウクライナ行きを仰せつかりました。

2月派遣は、例年その年のウクライナ支援のあり方を、現地カウンターパートのホステージ基金と打ち合わせるのが仕事。今回、主な課題は次の三点でしょうか。

- (1) **菜の花プロジェクトその後…**同プロジェクトは昨年一応終了したわけですが、現地に建設した BDF・BG 施設の管理、所有権を何処に委ねるか。今後展開される菜種の大規模栽培に、救援中部はどのように関わるのか。
- (2) **被災者の医療支援…**被災者 3 団体の支援は、今まで通り続ける方向で。ナロジチ病院については、現状をしっかりと把握し、必要なものについては支援する。
- (3) **現地の体制について…**長年駐在員として活躍されてきた竹内さんの帰国に伴って、大きく変わることが予想される。

3.11 から間もなく 2 年が過ぎます。メディアの扱いも減り、一般的には「のど元過ぎれば…」の危険性も増えています。福島では、「健康被害はほとんどない」「今後も起こらない」という専門家の発言も耳にします。そんな時だからこそ、チェルノブイリと福島の両方に関わり続ける活動が大切。

とりわけ、汚染地帯ナロジチ地区の現状をしっかりと把握し、多くの皆さんに伝えることが大切だと思います。また菜の花プロジェクトについての打ち合わせは、原さんが一緒なのでとても心強いです。

それでは行ってきます！

（小牧 崇）

真価が問われる日本とウクライナの菜の花プロジェクト

チェルノブイリ救援・中部がウクライナで「菜の花プロジェクト」をはじめてから、6 年が経った。

- ① 菜の花の栽培と放射性物質の吸着
- ② ナタネ油からのバイオディーゼル燃料製造
- ③ バイオガスの製造とゼオライトによる放射性物質の吸着 という一連の実験は成功した。

今年、ウクライナでも日本でも「菜の花プロジェクト」を実用実践する年になる。

ウクライナでは、汚染地域の畑 500ha にナタネを撒き、同時にバイオマス燃料ミスカントスの栽培に着手することになっている。

一方、日本での「菜の花プロジェクト」は、ウクライナでの実験結果を生かして、福島第一原発事故の被災地である南相馬市で実践し、農地の除染と農業の復興を目指すものである。計画では、今年 9 月に南相馬市の農地 30ha にナタネを撒き、来年初夏に収穫し、あわせて翌年から 2 年間は、ナタネ以外の大豆などを栽培する計画である。またこれ以外にも、農地の除染を求める福島の期待は大きい。

私は、菜の花プロジェクトの実験が始まって以来、同時進行で、長野県伊那にて「ナタネ栽培」（裏作での大豆栽培）とバイオディーゼル燃料（BDF）の製造・活用に関わってきた。その結果、ナタネ栽培は播種・栽培条件などに熟練が必要であり、BDF の実用に関しては、冬季の使用における燃料フィルター詰まりなどの問題があるなど、追加検証が必要であると考えている。また、実践に移すにあたっては、ウクライナでも日本でも資金・技術・運営主体など、課題も多い。

これからは、実験では許された「実験だから」という言い訳が通用しないのだ。資金も技術もしっかりと準備し、それぞれの現地の期待に応えたい。

（原 富男）



＜小牧さん・原さんを待つ、
冬のバイオガスプラント＞

サレジオ小学校のクリスマス会に参加して

(兼松 真梨子)

昨年12月22日に、静岡県草薙にあるサレジオ小学校のクリスマス会に出席してきました。サレジオ小学校とチェル救のお付き合いはもう20年以上になるそうで、毎年クリスマス会にご招待いただき、児童や後援会の皆さまからご寄付をいただいています。私は今回、初めて参加させていただきました。壇上でご寄付をいただくということで、少し緊張しながら、でも初めてのクリスマス会にわくわくしながら静岡へ向かいました。



到着してまず驚いたこと。受付や案内係など、すべて児童が行うのですが、私が受付をすると「兼松様、今日はお忙しい中お越しくださりありがとうございます。わたしが兼松様をお席までご案内いたします」と、大変丁寧に席まで連れて行ってくれました。心の中で、「本当に小学生かしら!?!」とこちらが恐縮してしまいます。始まったのは「アリババと40人の盗賊」の創作オペレッタです。この劇も大変よくできていて、楽しませていただきました。劇なんて見たのは何年ぶりだろう。私が小学生のころにやった劇とは全く質の違うもので感激しました。きっと、何度も練習を重ねて皆で作ったのでしょう。

第2部では、クリスマスページェント(イエス・キリスト誕生の聖劇)があり、その後、ご寄付の贈呈が壇上で行われました。このご寄付は、児童が給食のおかずや欲しいものを少し我慢して、コツコツと1年間ためてくれたものです。クリスマス会に参加して、「クリスマス」という日の見方が少し変わりました。私はクリスチャンではないので、生誕劇などは初めて見ましたし、私にとってのクリスマスは、単なるケーキを食べる日だったのですから。「手と手を取りあって」「希望に向かって」祈るクリスマスを過ごすのもいいなあ、心が洗われたような気分で帰路につきました。(結局、私のクリスマスは大掃除で終わりましたが....) サレジオ小学校の皆さま、ありがとうございました。



*****事務局のボランティアを募集しています!*****

チェルノブイリそして福島と、活動が活発になる中、活動の基盤となる事務局運営の強化がますます大切になってきています。そこで、事務局の運営をサポートして下さるボランティアさんを募集します!

支援活動に直接関わるボランティアではありませんが、事務作業や広報活動などを通して、私たちの活動に参加してみませんか?

~~~~~ ボランティアの内容 ~~~~~

(※月1回~週1回程度・ご都合のよい時間で)

- 書類のファイリングや資料整理
- イベントチラシの印刷や会報誌の発送作業
- パソコンの入力作業
- ホームページやブログの更新
- バザー用品の整理 等

* 詳しくは事務局までお問い合わせください。皆様のお力を是非お貸してください!!



ウクライナ→福島・南相馬、放射線測定器 50 台寄付

市井の支援積み重ね <毎日新聞 2012年12月21日 東京夕刊>

チェルノブイリ原発事故で汚染されたウクライナの貧しい村。その地から、東京電力福島第1原発事故で被災した福島県南相馬市に、放射線測定器 50 台が送られたという。測定器の軌跡をたどると、ウクライナと日本を結び、細く長い支援の積み重ねがあった。【東京外国語大・酒井友花里】

のどかな田園風景が広がるウクライナのジトミル州ナロジチ地区。この地区はチェルノブイリ原発の西方、約 60 キロに位置している。当時の人口は約 3 万人。今でも 1 万人以上がこの地に残り、食べ物による内部被ばくが続いているという。

今年 5 月、この地区で行われている食事調査に同行することができた。住民が食べている 5 日分の食事を持ち寄り、放射線を測定、内部被ばく線量との関連を調べている。その食品サンプルを集めている時、昼食に招かれた。「キノコは手をつけないようにしなさい。まだ、かなり汚染されているかもしれない」。長年、調査し続けたウクライナの研究者は、隣でそっとささやいた。窓からふと外に目をやると、隣の家は草が伸び放題の、人が消えた廃墟であった。

ジトミル州から、1 台当たり約 180 ドル（約 1 万 5,000 円）する手持ちの放射線測定器が 50 台、南相馬市に寄付されたと耳にし、興味を持った。

「日本に何かしたい」。福島原発事故後、同州の住民の声が強くなったという。チェルノブイリ原発事故後、世界各国から支援があったが、一過性のものが多かった。その中で、NPO 法人「チェルノブイリ救援・中部」は、現地からの支援要請を受け、中部地区で有志が集まり、1990 年、日本の民間団体として初めて現地訪問。それ以来今日まで、活動を続けてきた。医薬品や医療機器の供与、菜種による土壌改善プロジェクトなど、ウクライナの科学者や活動組織と積極的に協力している。

「住民の被害を最小限にしたい。そんな最低限共有できるものがあるからこそ、ウクライナ側と長年、協力できています」。チェルノブイリ救援・中部ウクライナ駐在員の竹内高明さん（51）の一言には、現地で活動を続けてきた実感がこもる。

原発事故の被害者を支えようとジャーナリストらが創立した活動団体「チェルノブイリの人質たち」代表のキリチャンスキーさんは、「お金を出してくれたのはね、村の年金暮らしのお年寄りたちが多いです。日本の人たちが、自分たちの政府以上に、長年自分たちの心配をし続けてくれたからと言ってね。なけなしの貯金を引っ張り出したんですよ」と語る。

ウクライナでは、必要に迫られ、日本のメーカーよりも放射線測定器の技術が進んでいるという。行政に頼らず自分たちで測るのが、何よりの自己防衛になる。そんな現地での教訓も踏まえ、測定器 50 台を送ることになった。

11 月、南相馬市を訪れた。ボランティア市民によって運営される「放射能測定センター・南相馬一とどけ鳥」に、その 50 台はあった。この測定器で南相馬市の放射能汚染マップが作られ、近所のスーパーや市民に無償で貸し出されている。

ここで働く神谷さんは、「専門的な正確さよりも、できる範囲のことを柔軟にやらないと、とても回らない」と語る。

目指しているのは、どこまでも、現地で暮らす人々が実際に「使える」ガイドラインだ。「本当に大事な支援ってなんだろうね」と、ここでボランティアスタッフとして働く小林秀紀さんはつぶやいた。現在、仮設住宅で暮らしている。震災の 1 か月前に、原発から 20 キロ圏内の小高区に住所を移したばかりだ。

一過性に終わらない、細々とした長い支援の積み重ね。そうした支援が、被災した当事者たちの支えになっている。



<2012年6月ルーマニアにて>

竹内さんのウクライナ便り(最終回)

昨年10月末のウクライナ最高会議選挙の結果は、日本でも報道された通り、大統領の与党「地域党」が議席の4割を占め第一党となる結果でしたが、連立相手の共産党の議席を合わせても過半数には満たず、また新たな野党としてボクサー・フリチコ氏の「打撃党」(正式名称は「改革を目指すウクライナ民主連合」で、頭文字をあわせるとウクライナ語で「打撃」を意味する「ウダル」となる)、民族主義政党の全ウクライナ連合「自由」が登場。ことに、党員が折々反ユダヤ主義的な発言をするなど過激な傾向の「自由」が、8%ほどの議席を得たことについては、「従来の政治家に幻滅した国民の批判票を集めたもの」と独立系のメディアでは分析されています。なんだか某国の最近の選挙結果に似ているような…。

新内閣は、大統領の家族と親密な人物や、地域党の影の実力者であるウクライナの富豪アフメトフ氏に近い人物で固められているものの、議会の運営は早くも波乱含みで進んでいます。

また収監中の前首相ティモシェンコ氏の、刑務所での劣悪な待遇による健康状態悪化や、同氏の別件(1996年に起こった実業家・政治家シェルバニ氏殺害事件への関与の疑い)での起訴など、相変わらず政治がらみのスキャンダラスな報道に事欠かないウクライナです。

ところで、私は一身上の都合により、3月にウクライナを離れ、妻とともに私の郷里の岡山市に移ることになりました。「救援・中部」のお手伝いは従来のように続けさせていただくつもりですが、それで、この「ウクライナ便り」も今号で終わりとなります。長きにわたり拙文をお読みいただいた読者の方々にお礼を申し上げます。今後ともはるか岡山から、ウクライナ社会の変動を見届けていくつもりです。

ウクライナを去るにあたって、以前から一度は行きたいと思っていた、ルーマニアとの国境にごく近いチェルニウツィを、正月の休みに妻と訪ねてきました。

18世紀から第1次大戦まではオーストリア-ハ



<コブイリャンシカ博物館にて、館長と妻と>

ンガリー帝国の一部で、19世紀末から20世紀初めにかけて興味深い小説を残したウクライナ語作家オリハ・コブイリャンシカが住み、20世紀のドイツ語詩人中5指に入るパウル・ツェランの生まれた、現在人口26万人弱のこぢんまりした州都。

30年前の学生時代に、故生野幸吉先生の講義でツェランを読んだ私は、一度、かつてはドイツ語でチェルノヴィッツと呼ばれたその町のたたずまいを見てみたかったです。

ウクライナでも文学は流行らないご時世のようで、私が妻と訪れたコブイリャンシカ博物館は、館長が私たちのガイドを懇切丁寧に務めてくれた小一時間ほどの間、土曜の午後でしたが他の訪問客が誰もおらず、貸し切り状態でした。ツェランの生家は、入口の傍らに記念のプレートがあるものの、ぼろっと古びたままの状態に残っており、その近くのツェラン通りに彼の記念碑があるだけでした。ナチスドイツの占領中にユダヤ人の両親を強制収容所で失い、戦後は長くパリに住んでドイツ語の詩を書いていたツェランは、ウクライナではまだまだ知られざる詩人なのでしょう。チェルニウツィ大学のドイツ文学研究者リュフロ氏が、ツェランのウクライナ語訳や紹介に尽力しており、またウクライナの著名な詩人何人かが、やはりこれまでにツェランの翻訳を手がけているようですが、でも、私としては、ツェランが生まれ育った1920~40年頃にはユダヤ人・ルーマニア人・ドイツ人・ウクライナ人などが共存していたというこの町の雰囲気や、少し感じられただけでもうれしかったです。それではごきげんよう、またいつかどこかでお目にかかりましょう。(1月22日)

事務局便り

新年早々の話としては恐縮だが、チェル救は厳しい財政状況に見舞われつつある。支援事業の縮小または終了も止むなし…との選択を余儀なくされるかもしれない。しかし、できるなら「チェルノブイリ」か「フクシマ」という二者択一的な選択はしたくない。「チェルノブイリ」は終わったわけではない。未曾有の原発事故の被害が、どれほど長い時間続き犠牲を強いていくのかということ、うやむやにしたいくない。これからもこだわり続け、現地の情報を把握し発信し続け、できる事をやっていきたい。チェルノブイリの経験と被災地から届いた情報やアドバイスが、フクシマ支援の一助となるに違いない。チェルノブイリ支援が、フクシマ支援・復興へと繋がる…。

東電福島第一原発事故による被害の顕在化は、おそらくこれからだ。内部被曝の影響を出来るだけ減らしたいという、「放射能測定センター・南相馬（とどけ鳥）」の活動は、ますます意味あるものとなり、充実させなければならない。

この間、身を賭して南相馬に張り付いて活動した理事長の一念と思う。チェルノブイリとフクシマを発信し続けることが、チェル救のミッションだ。センターの充実、「フクシマ復興菜の花プロ」の展開、そしてチェルノブイリ。本年も多くの方のご支援をよろしくお願いいたします。（山盛）

勧告書が完成！（ナタネ勧告書紹介）

「救援・中部」とともに5年間、「ナロジチ地区復興ナタネプロジェクト」を遂行、実質上のマネージャー役を務めてくれたシトームル農業生態学大学のディドゥフ准教授が、これまでの実験・研究成果を基に、今後ナロジチ地区でナタネ栽培を行う農民のため執筆した、詳細な勧告書ができあがりました。

カラー印刷で、写真や図表も多く、現地でのナタネ栽培にあたっての作業手順・土地や品種の選択・肥料の施し方など、具体的でわかりやすい内容になっています。ナタネやその裏作物による放射性物質の蓄積のデータ、バイオディーゼル燃料やバイオガスの生産技術についても紹介されています。現在、日本語への翻訳を進めています。（竹内 高明）



編集後記

☆今年の目標は「イライラしないこと」。婦人公論によると、福が来るらしい。しかし我が性格からすると非常に達成困難な目標だ。イライラしないようイライラしてしまいそうだ。（佳）

☆根拠は不明だけど、年齢を3で割ると人生を24時間で換算した現在の時間が分かる…なるほど。

私は一日を終え、夕餉の真っ最中ってことね。なんだか夕暮れ黄昏時間よりも嬉しかったりする。（美）

☆今度はアルジェリアで、日本人を含む多数の犠牲者が出た。またしても、イスラム武装勢力「アルカイダ」の仕業だという。しかし、真実は違う。NATO軍による、中近東・アフリカ諸国の国内情勢不安定化を企てる「テロの自作自演」である。当然、背景には、豊富な鉱物資源の略奪という狙いもある。そもそも「アルカイダ」とは、旧ソ連と戦うための傭兵として、欧米が作り上げた武装集団である。「911事件」や「アフガン・イラク侵略」のためには、「アルカイダ」を敵に仕立て上げ、リビアやシリアの政権を倒すためには、彼等に武器を与える。その傭兵達が今、その時の武器とともに、マリ・アルジェリアへと送り込まれている。日本人を人質にとり、殺害した真犯人は彼等である。（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473